

地域とともにある

勢いのある学校

No. 31 (R3. 1. 8発行) 文責 校長 福田雅也

【R3. 1. 5 HP先行掲載】

高き志【こころざし】

新年のスタートにあたって

「新年 あけましておめでとうございます。
今年も昨年同様、どうぞよろしく願いいたします。」

今年のお正月は、コロナ禍の中でいつもとは少し違ったお正月になりました。我が家も、いつもなら親戚一同が実家に集まるのですが、それぞれの家族ごとに日を分けて集まることになりました。また、初詣もいつもなら一日の午前中に行っていたのですが、二日の夕方を待ってお参りすることになりました。きっと、保護者の方々のご家庭も、何らかの対応をされたお正月だったと思います。とは言え、どうにか無事に新年を迎えることができ、ご家族で楽しいお正月を過ごされたこととお慶び申し上げます。

「帰れる場所をつくりたい」 「コロナ 初の四千人台」

この二つの言葉は、元日の熊本日日新聞一面の見出しです。どちらの見出しを見ても、今年スタートが希望に満ちた明るいスタートとは言えないことを如実に表しています。

一つ目の見出しは、7月豪雨で被災した球磨村神瀬地区にスポットを当てた記事でした。二つ目の見出しは、未だに収まる兆しがなく、大晦日に過去最多の感染者数を更新した新型コロナウイルスに関する記事でした。

前述のように「明るいスタートとは言えない」見出しですが、神瀬地区の記事内容は、希望や絆がしっかりと記されたものになっていました。地区外の仮設住宅等で多くの住民が暮らす中、地区にある寺の住職らが「こうのせ再生委員会」を発足させ、「みんなが帰れる場所をつくりたい」と様々な取組を行っている様子の記事でした。掲載されている写真も、笑顔で年越しそばを食べる人々の様子で、大きな困難に直面しながらも、それを乗り越える人間の強さを感じることができました。

しかし、新型コロナウイルスに関する記事については、見出しとともにその内容もこの先に不安を感じるものです。関連記事で、他の面に「新型コロナと文明」という寄稿が、二人の学者、教授から掲載されていましたが、その記事を読んでも、今後、新型コロナウイルス感染症が収まるまでの不安、そして、新型コロナウイルス感染症が収まった後にくる新たな世界への不安を感じざるを得ませんでした。

年末にあった校長等が参加する会議の挨拶の中で、次のような言葉がありました。「東日本大震災、熊本地震、新型コロナウイルス感染症と、私たちの世代が生きてきた中でも大きな災難がここ数年で起こっている。いま私たちが育てている子供たちは、幼い時期にそれらの大きな出来事を経験しながら育っている。」…心に大きく響く言葉でした。

この言葉を聞いて、そして元日の新聞記事を読んで、私たち教師に何ができるだろうかと少し考えてみました。しかし、私たちにできることは今までと大きくは変わらないのだと思います。子供たちは不安を抱えながらも、その不安を自分でも理解できないでいるのかもしれませんが、そのことをしっかりと心に持ちながら、目の前にいる子供たちをしっかりと見つめ、子供たちの声に耳を傾け、子供たちの心の中に思いを馳せ、一人一人に丁寧に接していくことを今以上に大切にしていきたいと思えます。そして、神瀬地区の方々のような人間の強さを信じて取り組んでいくことも大切だと感じます。

新年のスタートにあたり、こんなことを考えていたお正月でした。